

『高い山頂をめざせ』

社団法人北海道消費者協会会長 橋本 智子
(北海道生産性本部 理事)



階段を上り下りするたび、足が悲鳴を上げる。山仲間と北大雪の平山・平麻良山に登ってきたお土産である。登山口から沢沿いに標高1737メートルの稜線まで標高差721メートルを黙々と歩く。心臓が飛び出しそうになるが、途中の花や景色を見るふりをして休みを取る。途中の第一雪溪の付近はまだ、エゾノリュウキンカなど春の花が満開で、仲間は写真撮影に時間を割いたが、私は一人呼吸を整えるのに費やした。

そんな思いをしてまでどうして山に登るのかと聞かれるが、そんな思いをするからこそ何もかも忘れることが出来る場所がいい。登っているときは「もう少し登ったら楽になるかもしれない。」「後10歩で水を飲もう。」と目の前のことしか考えられない。たった数歩の平らな道さえ、幸せな気持ちにさせてくれる。そうやって苦しくても1歩1歩足を動かせばいつかは頂上に着く。ようやく稜線にたどり着くと目の前にニセイカウシュッペ山の雄大な姿が現れた。そこから頂上まではまさに平山の名の通り、平らで、コマクサ、イワブクロ、ウスユキトウヒレンのお花が咲き乱れ、頂上の楽園である。リーダーが下調べしたとおり、いい時期に登ることが出来た。苦しい山登りの最大の御褒美である。疲れた体を癒すとともに、下界での悩みも急にどうでも良くなってしまう。

下山の時、心臓は楽だが、足が疲れていて、なんでもないところで足を取られて転んでしまう。こんな急な道を良く登ったと自分で感心しながら、慎重に足を運んでいけばやはりいつかは登山口に着く。しかし、ここで差がつくのは普段の鍛錬である。この日に備え、120段の階段を10往復した人、毎日1時間以上を歩いた人との違いがこの足の痛みだ。

確実に歩めば頂上という目的地には必ず着く。でもその前の準備や下調べは丹念にすればするほど目的地に着いた時の収穫は大きい。目的が達成されてもその後慎重に行動しなくては頂上に登ったことも帳消しになってしまう。

山登りは消費者運動のあり方を教えてくれる。目標は高いほうが実りはある。現在、消費者行政の一元化を目指し、消費者庁(仮称)が創設されようとしている。この組織が実効性ある本当の意味で消費者のためになるように目標を高く持って創られることを期待したい。そのためにも、消費者団体として日頃の活動を通して実現して欲しいことを提言したり、消費者の要求を取り入れるように働きかけていく必要がある。

高い目標を持って出来たとしてもそれで終わりではない。きちんと機能していくようにしなくては、創った意味がない。足元を確かめながら高い山頂をめざしてほしい。